

1960年代以降の日本におけるメディア・イベントおよび その空間の機能に関する研究

[継続研究]

常勤研究者の部



新 藤 浩 伸

東京大学大学院
教育学研究科
准教授

序章 本研究の課題と方法

本研究は、企業・団体の文化イベントの開催状況および内容、そこに集った人々の分析を、日本武道館（東京都）所蔵資料に基づく過去の催事の検討を通じて行なう。それにより、1960年代以降から現在に至るまで企業・団体およびその開催イベントが大衆の政治や文化に関する意識に果たした役割を明らかにすることを目的とする。

日本武道館は、設置目的である武道の振興に関する催しが多様に開かれ、戦後日本の教育に果してきた役割は大きい。それに加え、多様な催しにも貸し出され、いつしかポピュラー音楽の「聖地」と呼ばれるようになっていった。

また、様々な式典にも用いられる。その代表ともいえる全国戦没者追悼式は1965年から行われており、8月15日は、武道館はもちろんのこと、式の模様がテレビ中継され、お盆で帰省した人々が家族でその模様を見る光景は、変容しつつも全国各地で続けられている。

このような多様な側面をもつ日本武道館が、戦後社会の中でどのような役割を果たしてきたのかを検証したい。

日本の「戦後」のなかで、スポーツ文化、音楽文化、戦後文化の象徴的な存在として、日本武道館は位置づいてきた。そして、「戦後」を作り出してきた空間ともいえる。こうした日本武道館という場所の歴史と論理を、日本武道館所蔵資料、関係資料、新聞・雑誌・映像等マスメディアの資料などを手がかりに、紐解いていく。

その際の手法として、筆者がこれまで進めてきた公会堂研究、教育学研究、メディア研究、社会学研究等の知見を活かしつつ、ある場所の歴史とそこに集った人々に徹底的に注目するという「空間の定点観測」を試みた。

第1章 日本武道館の成り立ち

江戸城北の丸という空間の歴史、明治以降の変転、1964年の東京オリンピックを契機に武道振興の会館を構想する正力松太郎を核とした動き、開館までの経緯、設計者山田守の思想などに注目して記述した。

1964年の東京オリンピックに日本武道館が使われたのはわずか4日、デモンストラーションを含めれば5日間に過ぎない。ここから、日本武道館の長い歴史が始まる。

第2章 武道の館

日本武道館は、その名の示すとおり、明確に「武道」の振興を目的にした施設である。日本武道館は、武道関係者以外の一般社会にはライブ会場や集会施設として認識されているかもしれないが、この中核となる施設理念を無視することはできない。

1. 戦後日本の武道振興、武道教育の拠点施設

日本武道館事務局長の吉川英夫氏は、日本武道館が武道振興に果たした役割として、以下の三点を挙げる。

第一に、1964年の東京五輪を契機とした武道全般への関心の向上である。

第二に、それを背景として、個別に活動していた武道各種団体が横のつながりを意識し始め、1977年に団体の連合組織である日本武道協議会が発足した。事務局は日本武道館内に置かれている。

第三に、学校における武道教育のための調査研究、情報提供を行ってきた。2008年3月改訂の中学校学習指導要領に、第1、第2学年の保健体育で武道が必修になることが明記され、2012年度から完全実施された。日本武道館および日本武道協議会は、武道の必修化に向けた取り組みを行ってきた。さらに、実際の指導にあたり、それまでの道場や課外活動とは異なる、学校での武道教育のあり方を示す『中学校武道必修化指導書』も数年かけて編集刊行している。

この武道教育の歴史については、教育学研究においてもほとんど深められておらず、今後研究が必要である。

2. 武道振興事業と一般催事の関係

この武道の館としての武道館の役割は、武道振興の館としての施設理念の中核に位置している。一般催事との関係においては以下の2点が重要である。

第一に、催事の開催にあたっては、まず日本武道館主催行事、そして武道関係の催事が優先され、音楽コンサートも含めた一般行事はあくまで空いている日に行われる。

第二に、一般行事を通じた収益は、武道振興の資金に充てられる。この仕組みは、開館直後から館職員の試行錯誤の過程で形成されてきたものである。

3. 施設理念がもたらす「格式」—ビートルズ来日公演をめぐるせめぎあい

この理念の部分で、ビートルズ公演がもたらしたライブ会場としての空間的価値とあわせ、会場に一定の「格式」（一般社団法人コンサートプロモーション協会鬼頭隆生氏による）を与えていることに異論はあるまい。以後、現在に至るまで、日本武道館は施設理念の根幹に武道振興をおきながら、経営の視点も重視しつつ、現在に至っている。一般貸し出しにあたっては、催事の質で判断するのではなく、館が定める利用規程に反しないことを確認した上で粛々と判断しているという。

第3章 催事の全体像

1. 各種行事の開催状況

日本武道館では開館の1964年10月から2014年1月までに、合計13960の催事が開催されている。日本武道館事務局長の吉川英夫氏は、これだけの施設

規模と、それに比して少ない職員態勢からすると、現在の稼働率は非常に高いと述べる。

2. 武道関係以外の行事

日本武道館が主体的に開催する事業を除いても、同館では上記の通り膨大な催事が開かれており、その全容を検証するのは非常に困難な作業である。まずここでは、大づかみになることを承知の上で日本武道館の主だった催事をあげてみる（本レポート記載、ここでは見出しのみ抜粋）。

- (1) 1960年代：東京オリンピック、ビートルズ、各種集会
- (2) 1970年代：来日公演、物販、教育文化産業
- (3) 1980年代：歌謡曲の成熟の場所、物販、企業のプロモーション活動の活性化
- (4) 1990年代：就職・進学イベント化、音楽イベントの充実
- (5) 2000年代：韓流、アニメ、スポーツ
- (6) 2010年代：震災後のチャリティイベント、アイドル・アニメ・ゲームイベントの活況、ヴァーチャル空間との関係変化
- (7) 2020年代：コロナ、オリンピック、オンライン

第4章 音楽の館

ここからは、同館が「一般行事」と呼ぶ、それ以外の催事について、音楽とそれ以外の行事に分けて検討していく。まずは音楽関係の催事についてである。

1. ビートルズ公演

まず、1966年6月30日～7月2日のザ・ビートルズ公演に触れないわけにはいかない。

この前後の催事をみても、ビートルズ公演は特異な存在であった。音楽演奏会場としてはすでに使われてはいたものの、初めてではない。それ以前、レオポルド・ストコフスキーの来日演奏会（1965年）なども行われていた。しかし、ビートルズの公演は、武道振興を中核理念とし、音楽にしてもクラシック等が中心であった武道館がポピュラー音楽に門戸を開いた間違いなく最初の例である。

2. ビートルズはどこで演奏したか—同時代の大規模音楽演奏会場

ビートルズが来日した1966年は彼らがツアーを停止する年である。当時の彼らの活動の特徴として、第一に、極限まで大規模化したコンサートは主にスポーツ施設で行われていた。これらの多くは都市を代表する大規模施設であり、都市の歴史を象徴する様々な歴史的イベントが開催されている。

第二に、音響技術が大規模化に追いつかず、ミュージシャンを納得させるだけの環境を用意することができなかった。ただし、1970年代以降急速に音響技術は発達し、大規模演奏会場でのライブも可能になっていく。

第三に、音楽のライブとレコードの関係が複雑な様相を呈していく。ビートルズはライブに疲弊しスタジオにこもることで、スタジオでしか録音、演奏できない音楽の制作に没頭していく。一方それ以降、1970年代以降の多くのアーティストは、音響技術が発達したなかでライブ活動を盛んに行うようになっていく。

武道館は、ビートルズ以後盛んにライブ会場としての使われ方をしていくが、その開拓者となった彼ら自身は、皮肉なことに以後ライブ活動を停止し、レコードを通じた表現、聴衆とのコミュニケーションへと軸を移す。彼らはライブの巨大化、グローバル化をもたらしたと同時に、ライブ活動とそれを可能にする技術の飽和点も同時に示したことになる。

3. 音楽文化が交わる場所

ビートルズ公演以降、いくつかの武道館ライブのレコードがヒットしたことを重ねて、武道館がライブ会場 Budokan として国内外で認知されていく。

ここで付言しておきたいのは、来日した洋楽アーティストの多くはワールドツアーを行っていたのであり、日本単独の歴史として描くだけでは一面的である。20世紀後半に起きた世界的な文化の交点としての日本武道館の位置づけを考えたい。ビートルズ公演場所を辿るだけでも明らかになるように、音楽演奏の場所は各都市に存在し、歴史ある場所の記憶が、それぞれのモノグラフで丹念に描かれている。海外だけでなく、スタジアム、ホール等の日本の文化的空間のモノグラフも数多い。相撲、野球、サッカー、ラグビー、プロレス、各種スポーツや文化イベントの「聖地」はそれぞれに存在する。一つの場所の掘り下げと同時に、他の都市や地域、ジャンルへの視点もあわせもつ必要があるだろう。

ともあれ、そうした目配りをした上でも、日本武道館は音楽の聖地であり続けている。

4. 「格式」の成立と変容

このような音楽関係者にとっての日本武道館の「格式」ともいえる特別な位置づけは、いくつかの点で変容をみせている。

第一に、まずこの格式は、前述の通りビートルズ公演が決定的な要因となつてつくられていった。

第二に、1980年代後半により大規模な会場がつくられていくことで、武道館は「到達点」から「通過点」になりつつある。

ここに近年の動向を付け加えるならば、2010年代以降に活性化する武道館をめぐるイメージは、それまでに創られた「格式」に乗りつつも、それを変容させていく力を持っているように思われる。2010年代以降、アニメやアイドル関係のライブが武道館では増え、日本武道館を題材にした小説、漫画などが数多く登場する。これらは、格式あるライブ会場としての武道館イメージをある種再生産し、活用し、ずらしていく試みと言っても良いだろう。

5. メディア環境の変化の中で

(1) ライブのもつ意味の変化

コンサートプロモーション協会の鬼頭隆生氏によれば、レコードやCDが売れた時代（最もCDが売れたのは1998年）は、ライブはあくまで新曲のプロモーションが目的であった。全国ツアーなども収益よりは知名度の向上を目指したもので、ツアーは赤字でもチケットを安くし、レコード会社が協賛金を出すような時代が1990年代頃まではあったとみられる。ところが今は、CD販売よりもツアーにより収益をあげる構造になっている。そのため、ライブのもつ価値と意味はCDが売れた時代から変化しているという。コロナ以後も、この状況は変わっていない。

(2) メディア環境の変化

鬼頭氏は、不況等経済情勢の変化よりも、メディア環境の変化の影響を受けやすいと述べる。コロナによる落ち込みは別にして、例えばバブル崩壊やリーマンショック等で音楽公演や集客、収益が減ったかと言うと必ずしもそうでは

ない。むしろ、メディア環境の変化によるところが大きいという。

(3) メディアの中の日本武道館

日本武道館では多くの音楽イベントがあったとはいうものの、大半の人はそこには直接参加していない。テレビ、ラジオ、雑誌、レコード等で伝えられる武道館にあったのではないだろうか。街の書店やレコード店ででの出会い、読書、鑑賞といった出来事として体験する武道館の姿の方がリアリティを持つのではないか。すなわち、武道館のリアリティは武道館そのものだけではなく、それを取り巻くマスメディアとともにある。人々は武道館での音楽をどう体験したか。それを今後探求していくことが必要であろう。

第5章 集いの館

日本武道館は多様な行事に用いられているが、特に全国戦没者追悼式に注目しながら、人が集まる場所としての武道館の意味について考える。

1. 全国戦没者追悼式—令和元年 8 月 15 日

2019 年、全国戦没者追悼式が行われる 8 月 15 日の日本武道館周辺を散策した。武道館は天皇の臨席のもと、非戦と平和を願う空気が充溢する。一方の靖国神社では、それに加えて改憲、近隣諸国への好戦的な言論もチラシや演説、集会等で飛び交う。いかなる思想的立場の人も、8 月 15 日というある種の記号がもたらす儀礼に身を浸し、悲しみ、憂い、どこか楽しんでいる。外国人も多い。語弊を恐れずにいえば、8 月 15 日、九段一带は「戦後日本」を経験するのに最適なアトラクションの空間なのかもしれない。慰霊と祝祭の一日として、8 月 15 日は消費され、また生み出されていく。近代以降の歴史の中で、九段一带はそのような場所性を帯びてきたのだろう。

2. お茶の間の「8 月 15 日」演出装置

全国戦没者追悼式がテレビ中継されるのは、2019 年の場合は 11 時 50 分から 12 時 5 分までである。実際の式は、午前 11 時 51 分から約 1 時間である。

このプログラムはどのようにして考えられたのか、検証が必要だが、お茶の間に流れる 8 月 15 日は、1945 年 8 月 15 日を擬似的にでも追体験できるように巧みに作られているともいえる。

しかも、地域にもよるが、終戦の日である8月15日は盆休みの帰省と重なる。この日、実家でテレビを見ながら昼食をとる家庭も少なくはないだろう。家族皆で終戦の日を思いながら過ごす、8月15日の風物詩の一つとなっているのではないか。

3. メディアの中の国民劇場？

しかし当然ながら、そのようにしてお茶の間に集う人々が全てだとはいえない。そのようなライフスタイルも変貌をとげつつあるだろう。帰省という営み、「テレビ」が「茶の間」の中心に座す、という生活スタイル、メディアは、戦後の昭和、そこに地続きの平成的なものであったのかもしれない。

そして、日本武道館は、そうした生活様式を作り上げることに寄与してきた、いふならば国民劇場の一つであったのかもしれない。東京オリンピックにあわせて開館したという歴史的経緯、「武道」の館という施設機能、ビートルズ来日とその後の音楽の「聖地」としての意味もあいまって、「戦後」「日本」の歴史を語るのには格好の空間であった。立役者である正力松太郎、そして天皇の存在を思えば、日本武道館は、もう一つの正力の仕事である後楽園球場とならび、彼が劇場支配人となった大衆の国民劇場、という見方もできるかもしれない。

ただ、そうやってしまうのはたやすく、早くも結論にたどり着いてしまう。それに、あまりに粗い分析といわざるをえない。そうした口当たりの良い近代史や戦後史の一面を描きたくなる誘惑に禁欲的になりつつ、もう少し丁寧に、武道館という空間の実態を施設の内側と外側からひもといていく必要がある。

4. 官民一体の賑わいの空間

すでにみてきたように、日本武道館では音楽イベントや国家行事はもちろんのこと、多種多様な企業や団体の集まりが催されてきた。展示即売会、定期総会などに加え、株主総会なども開かれる。企業の消費者感謝祭なども開催される。武道館は、消費と儀礼が交錯しながら、企業のイベントが行われる空間なのである。数多くの物販イベントの開催も当然ここに入ってくる。

また、先の8月15日に付け加えるならば、8月のテレビ番組の定番に「24時間テレビ」がある。8月下旬に放送されるこの番組も、家族揃って観る可能性の高い、武道館イメージを形成する有力な番組である（ただし、2019年以

降は両国国技館で開催)。

1964年開館の日本武道館は、この全国戦没者追悼式と24時間テレビ、そして何より1964年の東京五輪に顕著なように、まさにテレビの時代の集いの場であったと言って良い。官民多様な催事が、テレビ(そしてライブ録音のレコードもそうだろう)に乗せられて各家庭に運ばれ、戦後日本のお茶の間をにぎやかに演出する空間であった。武道振興の空間でありながら、大衆社会における、あるいは大衆社会をつくるメディアの空間、といてよいのかもしれない。

終章 考察および今後の課題

本研究では、音楽においても国家行事においても、重要な催事が数多く開かれた日本武道館の定点観測を通じて、特にメディア・イベントの空間としての同館の機能に注目してきた。

第1章では、日本武道館の成立までを記述した。江戸城北の丸という空間の歴史、明治以降の変転、1964年の東京オリンピックを契機に武道振興の会館を構想する正力松太郎を核とした動き、設計者山田守の建築思想などに注目して記述した。

第2章では、日本武道館の施設理念の中核である武道振興の実態について、同館職員へのヒアリングも交えて行った。ビートルズ公演の際に顕在化する啓蒙と娯楽、武道振興とそれ以外への貸し出しをめぐる論理のせめぎあいは、武道振興という目的を果たすための一般貸し出しという論理において調停されるが、それだけには限らないものをもつように思われる。第一に、正力松太郎と読売新聞において、大衆啓蒙と大衆娯楽は表裏一体をなす部分が存在したのではないだろうか。第二に、武道行事も多様な音楽も、そこに参加した人々の心身の糧になっているという点において矛盾はないように思われる。

第3章では、武道館が残した資料を元に催事の全体像を示した。まず概略を大きく掴むことで次章以降の、また本研究以降の継続的な考察の準備基盤の形成を試みた。

第4章では、音楽演奏会場としての日本武道館の位置づけに注目した。その後音楽演奏会場としてのステータスを高め、音響技術向上のきっかけをもたらした、文化交流の拠点となった、といった様々な意味で大きな影響力をもったビートルズ公演に注目し、特に同時代の音楽演奏会場との比較を試みた。日本以外にも各地で公演を行ったビートルズは、各地の文化の変容の触媒となっただけ

でなく、それぞれの演奏会場のもつ意味も変容させていくインパクトを有していた。武道館はその後、国内外のアーティストにとって特別な意味、「格式」を有するライブ会場になっていく。本来の施設理念とビートルズ公演という2つの意味で付与された「格式」が武道館には存在する。近年では、大規模会場が増えていく中で武道館は「到達点」から「通過点」へと変容しつつあるほか、2010年代以降の武道館のメタ的な言説やサブカルチャー関係の公演を通じて「格式」の意味は再生産されながらもずらされて変容しつつある。また、メディア環境の変化の中で、レコードや雑誌、テレビ、ラジオ、インターネット等のメディアの中で、人々は武道館をどう体験したか、探求していく必要がある。

第5章では、武道と音楽以外の催事について検討した。第一に、全国戦没者追悼式に注目し、それがテレビ中継されることで、各家庭のお茶の間の「8月15日」を演出する装置になりえていることを指摘した。第二に、他にも国家的行事が各種行われるが、一方で同じ8月には24時間テレビも放送される。武道館では官民多様な催事が流れるように行われることで、官民一体の賑わいのある空間を作り出している。

日本武道館は、北の丸公園という国家および東京の中核部分に位置し、常に国旗が掲げられ、武道振興という啓蒙と修養の空間でありながら、聖俗入り交じる賑わいもあわせもっている。この性格は、靖国通りを挟んで位置する靖国神社と比べると興味深い。明治初期の創建当初の靖国神社は、洋式競馬場が設けられるなど、荘厳、厳粛な空間というよりも人々の賑わいの空間であったことが知られている。第二次大戦を経て、靖国神社は英霊が眠る場所として厳粛な空間になった。それに対して日本武道館は、どこか創建当初の靖国神社を想像させてくれるような、格式と賑わいが入り交じる空間として存在しているのである。

本研究終了後以降も、資料の詳細な検討、メディア研究・空間研究・現代史研究としての方法論の精緻化、収集資料の活用・公開等を意識しつつ、日本武道館の歴史研究を続けていきたい。